

若者の求めているもの

恒 川 武 敏

現代社会は経済的にも、道德的にも、教育的にも、家族社会もすべて流動し多様化している。この中において激動もしないのはただ仏教の原理である。

仏教本来の姿は人間の日常生活にあつて、常に人間の生きる道であり、真の幸福を与える自己を発見することである。それがいつの間にか道俗という二つの仏教が存在するかの如く、仏教は職業としての僧侶、あるいは寺院仏教・葬儀仏教として一般社会から理解されるようになった。しかし、現代社会に真の仏教は在家の中に浸透し、あるいは現代の若者の真に求めているものが仏教の原理である。

私は或る日、所用のため京都北嵯峨の直指庵を訪れ、沢山の若者がここに来ていて有様をみて、更にその庵主さんから「こ

ろの灯」という本をみせて頂き、仏教の現代化とはこのことに外ならぬと思ったのである。

その本の一節に、「直指庵。立札がなければ、見落してしまいそう、さして目立ちもしない造り。丈の高い、竹林に守られるように、ヒソソリと建っている。汗ばんだ足裏に、畳のひんやりした感触がうれしい。運ばれてきた、おうすに、のどをうるおす。ホテッた身体に、その波味がいきなり、背筋が、ピンとのびる。

目を閉じると、竹の葉ずれが、遠い潮騒の音にきこえる。どこか北の海、砂浜に波うちよせて、ひいていく、波の音、岩にぶつかる波しぶき……。

みがき上げられて黒光りする廊下の片すみに小さな机が。その上に、ノートがあ

る。開いてみると、この直指庵を訪ねた人々の落書帳である。(中略)さまざま人の、さまざま心もようが、さまざまの字で、さまざまの言葉で、つづられている。

春・夏・秋・冬それぞれの人が、それぞれの心で聞いたであろう、この竹を渡っていた風の音。雨・晴・雪それぞれの人が、それぞれの心で坐ったであろう。この黄緑の畳。喜び、悲しみ、怒り、それぞれの人が、その心をつけたこのノート。(中略)なんと素直な、なんと飾り気のない、なんと美しい、それ故に、なんと哀しい人間のドラマであろう。」

このノートは庵主さんが何の気もなく古いノートを机の上に置いたのが始まりで、十年余の歳月の間に、庵を訪ねてきた人々が、落書や想い出のために書き残されたもので、現在では千五〜六百冊になっているとのことである。

直指庵そのものは、取り立てていうほどの宝物や史跡のある由緒寺院ではない。しいていえば、禅僧・独照性円上人が開かれた庵で、江戸幕末に近衛家の老女村岡の局が、戦に斃れた人々の霊を弔うために、浄

土教の尼寺として再建されたということである。

さらに、環境としては、嵯峨大覚寺の北方七百米の山裾の静閑な竹林の中に建立された小さな庵である。冬の雪の日には、山深い寒村に居るような淋しい所であり、秋の日には、汽車の「ボー」という音が遠く南方の彼方から聞え、犬の吠えと共に郷愁をかり立てる。夏には、蟬の焼きつくような声がかかるかと思えば竹藪を渡る風の音が、さわやかに涼風を送り、一種の仙境をかもし出す。春は京都で一番遅い所であるが、真直に伸びた竹林を望めると禪宗の考案の如く人生の多くを物語っているようである。

悩みを持った人々が、ここを訪れて、このような環境に接する時、静かに自分を反省し冷静に帰った時、真実の自個の姿を発見し、生きる決心が起きるのである。

想出草の中に「誰が名づけたのか、直指庵を泣き込み寺といいます。泣き込みは、ほとんどが男と女のこと。十七歳で出家し（庵主）男はんのことまるで知らんうちに、その悩みを相談されているのは妙といえ妙とす。

だが、多くの男と女の話の間かされてきた長い年月の後に、一つの悟りを得ましたのや。それは、恋も徹底的にうち込んでみれば、仏道修行と同じなにかがあるということとす。恋人のために、世間の評判も、名誉も、地位も、親さえも捨てていく激しさ、厳しさは道を求めて生きる人と共通項がありはしませんか。」と述べているのを見て、若い人に接する態度も真剣とならざるを得ない。

直指庵を訪れた人は、尼さんと接することにより、一層仏教的情操を喚起する。そこで話しかけてくれる老尼の言葉は一種特有の響きを持って若い人々に理解されている。老尼の言葉で「男はん、女はん」「ねぶりあい」というように、古風な表現が力となっている。また「シューマイ」を「たこやきかいな」と言うように、飾り気の無い、心に思った事を言葉にする所に、若者が近づき易さを感じるのであろう。

更に老尼の意志堅固な思想が、旧来の仏教語の解説でなく、自身の信念として話す所に現代人の魅力があるように思われる。想出草のノートの中に「三度目の直指庵。今日は報告に来ました。私は、今年一ぱい

で会社を退社するんです。私の好きな人は私が退社する事を告げた時に、二重の苦しみ味わうと言いました。でも、私は家に帰るんです。あなたのほのかな愛情も清算して、きつとすばらしい人と結婚します。

どうしても思い切れなかったあなたへの愛も、とうてい二人は一緒にはなれない事がわかり、私は田舎に帰ります。直指庵って、私の心を、すごくなぐさめてくれます。今度はいつ来れるかもしれません、今度来る時は、きつと、二人で来ます。そして、すばらしい報告に来ます。 洋子

S四六年一〇月二八日

直指庵に来てよかった。庵主さんの言う通りだった。という確信がその人を救ったのであろう。そして、彼と結婚して必ず二人で直指庵を訪れよう。また、或る人は来年もここにきて、その結果を報告しよう、という様なことが書かれている。即ち、許されぬ恋、親子の問題、友情、失恋、孤独、恋愛、死の問題等多くの事柄が若い人達の訴えとしてノートに綴れ、庵主との対話物語が行なわれている。

以上のような姿は、若者が人生の苦難の道に遭遇した時、最初に訴える相手は、友

人であつたり、尊敬する先生であつたり、あるいは、本人の最も相談し易い方を選ぶのが常道である。しかし、そのようにしても解決できず、最後まで悩み抜きながら、仏教の古都である京都に来て、神社仏閣を訪れ、祈りもしたが、得る所なく、洛西の最勝の地を求め、この直指庵にたどり着き、想出草のノートを読み、多くの苦者の悩みを知りつつ、自からも静かな環境の中で、俗世間を離れ、無心になって、心の動くままに、このノートに訴えることにより、自己の悩みを放出することが出来る。そしてついに自分の真に生きる道を発見しているのである。しかも、庵主さんの人生経験豊かなものが、ついに若者の心の中に現実の姿として受取られていくのである。従来の説教、教化の方法は、僧侶の一方的な仏教語の解説であつたり、自己の体験の押売りであつたり、あるいは感情的な信仰状態としての信心発起であつた。悩める人の立場に立ったものでなく、本人自身の深刻な反省でもなく、自覚から生ずる確信でもなかった。恰かも、感激する映画や演劇を見る如く、その場面のみの感動であり、一辺の清涼剤であつた。

若い人達の真実求めているものは、そのような観念的、平面的な解決ではなく、自己決定する自内証のものである。

この世の中は余りにも、喧噪にして煩雑なことが多すぎる。毎日の生活の糧となる食物の調達にしろ、隣近所の交際にしる、日常生活が追い廻されている。特に文明社会になれば分業が進み、病気にしろ、内科・眼科・外科等、病気の種類によって医師も変つてゆく、更に最近の交通網は各会社の乗り入れによって、便利である反面複雑化している。このように現代社会は文明がもたらす複雑さの為に、毎日の労働に追われている者にとっては、極端に神経をすり減らし、かつ、その中において人生のあらゆる経験を積み重さねている。誰れしも人生の矛盾を感じ、社会悪を痛切に看取しているが、それを如何にして是正し、乗り切るかが問題となっている。それ故に、誰れもが静閑な地で、大自然に接しながら静かに自分を見つめて生活したいと念ずるのである。

仏教の現代化そのものは各種の見方があるが、若者は現代の世相の中にあつて、常に自己の悩みを解決しようと努力している

が、今日の若者の悩みを正面から取り組む姿勢が仏教側にない。寺院仏教は葬式の間であつたり、若者のお茶お花の修養道場であつたり、教化の場であつて、悩みをもつ人の泣き込み寺なり、駆け込み寺、というような問題を持った人々が、それぞれを解決してくれる寺が余りにも少ない。

現代の若者は大自然の中に静かな環境を求め、しかも同年輩の人々の集る中で、自分個人をみつめようとしている。その求めているものに應ずるためには、寺院は静寂なしかも、清掃のよく行き届いた環境を作り、誰でも気軽に入れる場所にしなければならぬであらう。そして仏教の原理を自ら理解できるよう、本人の要求に應ずる応病与薬のものでなければならぬ。即ち若者が耳をかすような対話ができることが要件となる。若者は真実に自己を求めている。それに應ずる一方法としては想出草のノートに悩みを表現させ、環境と対話を与えることも現代化である。これらの事柄は一朝にして出来るものでなく、個々人の努力とたゆまざる工夫により、常にその時代に應ずる対機説法である。

(仏教大学教授・社会福祉学)